早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　16号 -2　2009年3月

清代中国における啓蒙私塾の発達とその性格

胡　　学亮

はじめに

本論文は，清代中国における啓蒙私塾の普及状況とその経営形態や教育活動を考察し，私塾経営における特徴を明らかにするものである。

私塾は，教員が自宅あるいは寺や祠堂に設けた教育機関であり，「学館」・「門館」・「散館」などとも呼ばれている。中国では，古くから「蒙以養正」（幼いうちに，児童に積極的にプラスの影響を与えること）という説がある。児童を啓蒙する私塾は近代学校制度が成立する以前の中国民衆の最も身近な主要な教育機関である。その設立は，清代になると，いっそう盛んになったようである。しかし，啓蒙私塾は小規模かつ私的な性格のために，地方志を含む公記録類や族譜などに採録されることは甚だ稀であるため，その普及状況や経営形態を示す正確な統計資料を得ることは容易ではない。幸いに，1905（光緒31）年に国家中央教育行政機関である学部が設けられ，1907（光緒33）年にはじめて全国的な教育調査が行われた。特に9110（宣統2）年に学部が私塾改良のため，私塾の種類・生徒数・教員数などについての調査を各省に求めたが[1]，この調査の全国の統計資料は今日においても確認することができない。おそらく翌年に辛亥革命が起こったので，実際に多くの地方では調査が行われなかったのであろう。しかし，その後特に1980年代半ば以降，一部の省（浙江・安徽・福建・江西・河南・山東・河北省）や県において，地方志を編纂する際に，清末の私塾に関する調査データを発見し，それを地方誌に集録した。

そこで本論文では，これらの資料を利用し，まず啓蒙私塾の普及状況や私塾への就学率について考察する。そして清代の私塾教育を受けた人々の年譜や自伝（回顧録）を分析し，彼らの啓蒙私塾での学習生活を考察するとともに，啓蒙私塾の経営と教育活動における特徴を探ってみる。

1．啓蒙私塾の普及状況

上述した7省の県の地方志を用いて，清末中国における私塾の開設状況を調べた結果をまとめると，表1のようになる。

この表が示しているように，清末の7省20県における啓蒙私塾の普及状況は，開業総数が40校から2,000校までさまざまであるが，一県あたりの平均私塾数は314校となる。また，清末の各県の人口を調べ，私塾数に対する人口の比率を求めてみると，394人の河南省新安県から6,683人の河南省

表1　清末中国における7省20県の私塾の開校数[2]

地名		私塾数と生徒数			人口		人口／私塾数
省名	県名	私塾数	生徒数	調査年代	人口	調査時期	
浙江	諸暨県	790	—	清末*1	458,501	民国1（1912）年	580
浙江	岱山県	100	—	宣統1（1909）年	76,601	光緒25（1899）年	766
浙江	奉化県	399	5,920	宣統1（1909）年	327,909	宣統2（1910）年	822
浙江	普陀県	80	—	光緒33（1907）年	79,461	光緒26（1900）年	993
安徽	桐城県	2,000	—	民国初期	914,368	民国8（1919）年	457
安徽	霊璧県	191	2,727	宣統年間（1909-11）年	296,816	光緒30（1904）年	1,554
福建	寿寧県	50	—	清代半ば	131,438	道光9（1829）年	2,629
福建	建陽県	200	1,000	清末	153,409	民国1（1912）年	767
江西	修水県	400	—	民国初期	429,629	同治9（1870）年	1,074
河南	確山県	40	—	宣統2（1910）年	267,300	民国10（1922）年	6,683
河南	登封県	200	—	清末	132,154	乾隆40（1775）年	661
河南	新安県	393	—	清末	154,977	光緒3（1877）年	394
山東	即墨県	241	4,653	光緒30（1904）年	342,534	光緒31（1905）年	1,421
山東	平邑県*2	(89)	—	清末			
河北	景州*2	420	—	清末	206,154	光緒9（1883）年	491
河北	撫寧県	227	—	清末	280,210	光緒9（1883）年	1,234
河北	趙州*3	200	—	清末	145,283	光緒9（1883）年	726
河北	永平府*4	197	—	清末	89,257	光緒9（1883）年	453
河北	阜平県	75	—	清末	36,920	光緒9（1883）年	492
河北	望都県	71	—	清末	58,689	光緒9（1883）年	827
合計		6,274	—		4581,610		730

備考　1.「私塾数」と人口は各県の地方志による（文末脚注3に参考）作成。
　　2. 平邑県は清末の老費県の一部であり、当時の人口は知ることができない。
　　3. 清末は19世紀末20世紀初期である。

確山県までとなっており，20県の平均では，私塾1校当たりの人口は730人前後である。

また，入学率については，表1のリストにあった在籍児童数が明らかな奉化・霊璧・即墨の3県を対象とした検討をする。中国には古くから子どもが7歳～15歳まで私塾に通うという伝統があった。また，総人口に対する7～15歳の児童数の百分比はおよそ15.37%となり[3]，これに各県の総人口をかけて，7～15歳の学齢児童数を算出し，さらに入塾率（在籍児童数÷7～15歳の学齢児童数）を求めると，表2のようになる。

奉化・霊璧・即墨3県における児童の入塾率はそれぞれ11.8%，6.0%，8.8%で，平均7.8%である。しかし，啓蒙私塾に通っていた児童は7～15歳に限られていないので，実際の入塾率は上の数値よ

表2　啓蒙私塾の入塾率

県名	私塾数	在籍児童数	人口	7-15歳児童数	入塾率
奉化県	399	5,920	327,909	50,498	11.8%
霊璧県	191	2,727	296,816	45,710	6.0%
即墨県	241	4,653	342,534	52,750	8.8%
合計	690	11,573	801,881	148,958	7.8%

備考　7～15歳児童数＝人口×15.37%。

りもっと低いと考えられる。清末の中国農村児童の入学率について，舒新城の回顧によれば，彼が住んでいた劉家渡村は，「20数戸しかなかった。村の人々は専ら農業に従事しており，字を読め，手紙を書ける人は数人にすぎなかった」[4]というように，私塾教育を受けた人は非常に少ないことが窺える。

しかし，啓蒙私塾の入学率が10%未満とはいえ，近代学校制度を導入する以前において，啓蒙私塾は中国民衆の主な教育機関であるといえる。例えば，清末の河南省における教育機関のうち，書院が126校，義学（族塾を含む）が215校であるのに対して[5]，私塾は30,000校を超えた。また，浙江省奉化県では，県学が1校，書院が3校，義学（族塾を含む）が56校[6]，私塾が399校であり，ほかの教育機関と比べて，私塾は圧倒的に多く，中国の民衆教育において大きな役割を果たしたのである。

2．啓蒙私塾の組織形態

以上，清末中国における啓蒙私塾の発達について考察してきたが，次に，主に清代に書き残された60人の年譜や伝記史料成[7]を分析し，児童の入学時期・入学年齢・教員学習歴などついて考察する。

(1) 啓蒙私塾の入学年齢と学習期間

まず，上述60人の啓蒙私塾の入学年齢について検討する。啓蒙私塾への入学年齢が明記された60人をみると，4歳入学から11歳入学までであったことになる。そのうち，6歳（数え年，以下同）から入学する場合が最も番多く，全体の31.7%を占めている。5歳，7歳と8歳から入学するのは，それぞれ26.7%，18.3%，11.7%である。5歳～8歳から入学するのは合わせて88.8%であった（表3）。啓蒙私塾への入学年齢は5歳～8歳に集中していたといえる。

表3　啓蒙私塾の入学年齢

入学年齢*	人数	百分比
4歳	3	5.0%
5歳	16	26.7%
6歳	19	31.7%
7歳	11	18.3%
8歳	7	11.7%
9歳	2	3.3%
10歳	1	1.7%
11歳	1	1.7%
合計	60	100.0%

備考：年齢はすべて数え年である。

次に啓蒙私塾の学習期間について，上述の60人の年譜や伝記を対象として検討する。60人の中で，繆荃敏・胡適など極少数の者を除いて，ほとんどは，同一の啓蒙私塾において勉学を長く続けずに，1，2年の経過した後，転学している。例えば，雲南沖騰県出身の李根源は，8歳の時に貢生李本栄が開いた私塾に入学し，2年目から張士容の私塾に転学し，その後，張子琨・趙端・杜子涛などの私塾教員に就いて儒学教典を学ぶというように，ほぼ毎年転校している[8]。

以上のように，啓蒙私塾の学習年数は就学者の希望によって一様ではないが，しかし，15人の学習順序の一覧表（表4）みると，啓蒙私塾という初等教育内容を修了するには，4年～7年間位かかるようである。

1日の授業時間については，張之洞の年譜によると，「朝は登校し，夕方に帰宅する。昼食は義理祖父の家でする」[9]という。また，舒新城の回顧によると，朝から夕方まで私塾で授業を受け，夕食の後，自宅でまた1日の既習内容を復習した。このような生活が「毎日繰り返し，休日はほとんどなかった」という[10]。また，陳鶴琴の回顧録「我的半生」によれば，「まず朝8時頃に登校し，午前11時半頃まで家業に精励し，それより午後1時前後までは，昼食をとるために帰宅を許される。午後はまたしても4時頃まで授業が行われてようやく放課となるのであるが，成績不良の児童はさらに延長されることがある」という[11]。このことから，啓蒙私塾は終日授業を行っていたものと考えられる。

(2) 啓蒙私塾の教員の学習歴と教養

啓蒙私塾の教員の学歴と教養をみると，60名の教員のうち，「貢生」（科挙予備試験に合格したものから選抜されて首都の「国子監」に入学したもの），「廩生」（予備科挙試験に合格して俸給と米を支給された府・州・県学の学生）と「諸生」（府・州・県学の学生）などの学位をもっている教員は10名で，全体の16.7%を占めている。そのほか，肩書のない教員はほとんど「童生」で，これは科挙予備試験にまだ合格していない読書人であると推測できる。このことから，20%弱の啓蒙私塾は，府・州・県学を受けたある程度の儒学教養をもっている少数の「諸生」，すなわち秀才たちによって開業されていたが，その大部分はやはり一定の学習を積みながら科挙予備試験にまだ合格していないいわゆる「小読書人」によって経営されていたことがわかる。

この点に関連して，包笑天の回顧録には次のように記されている。「昔の読書人は，府・州・県学に進学することを目指していた。府・州・県学で勉強した人は生員すなわち秀才と呼ばれている。入学試受験を準備している人を『童生』と呼び，5，60歳になってもまだ合格できなかった人を『老童生』と呼んでいる。昔の蘇州の塾の教員にも等級があり，それが科挙試験の成績によって決められている。教員の中でも，府・州・県学に進学できなかった童生は等級が最も低く，俸給も一番少ない。県学などに入学できたら，等級と俸給も高くなる。もし優秀な「廩生」になったら，その格がもっと上がっていく」[12]。ここに記されているのは，当時の啓蒙私塾の教員の資格と学歴の実際であったといえよう。

(3) 啓蒙私塾の束脩と学金について

①私塾の束脩

「束脩」とは本来束ねた干し肉の意を指し，古代中国では入門する時に持参した礼の品であった[13]。すなわち，古代中国には，児童が私塾に入学する時に教員に干し肉や礼物を贈呈するという習慣があったが，清代になるとその性格は変わった。例えば，前述した包笑天の伝記は次のように記述している。

包天笑が入学する際に，教員に「定勝糕」（必ず勝つ糕）と呼ばれる餅と粽を一皿ずつ送った。糕と粽を一緒に綴ると「糕粽」という単語になり，その発音が「高中」と近く，将来の科挙試験に合格し高い官職をつけるという意味になる。また，粽の中に，1つの粽が印鑑のかたちのようにつくられ，「印粽」（官庁の印章の意味）と名づけ，もう1つの粽が筆の形のようにつくられ，「筆粽」（「必中」すなわち必ず合格との発音が近い）と名づけた。放課後，教員が束脩中の「印粽」と呼ばれる粽を返礼として包天笑に返し，そして包天笑がそれを抱いて，すなわち将来官職印章のつまみをつかむようにして，家に帰った。このことからみれば，清代の束脩は贈り物から象徴的なものへと変わってきたといえる。

②私塾の「学金」

児童が私塾を入るために「学金」というものを払う必要がある。私塾の「学金」についてまず包天笑の例をとってみる。蘇州出身の包天笑は13歳から朱姓の教員が開いた私塾で勉学し，教員の家に寄宿していた。学金と食費の合計は1年間で36元であった。その中で食費は1か月おおよそ2元必要であるから[14]，学金は月に1元で，年間で計12元であると推察できる。

また，湖南省出身の舒新城の伝記によると，私塾の教員に支払った学金は在籍していた10数名児童の家庭がそれぞれの経済状況に応じて分担していた。舒家が分担した学金は年間で1,200文（約0.75元）であるが，それは，母親が4日間かけて摘んだ野生の綿花の価値に相当した[15]。このことから，湖南省の私塾の学金はかなり低かったといえる。

安徽省出身の胡適は，私塾の学金について彼の回顧録「四十自述」で次のように述べている。すなわち，田舎の塾の学金は大変安く，1年間で1人の生徒がわずか2元以下で済んだ。しかし，胡適の母は子どもの教育に強く関心をもっており，入塾の最初の年に学金6元を払い，その後，毎年学金を増やし，最終の年に12元を払った。これは村の記録を破った金額であるという[16]。

以上の諸伝記の分析から，啓蒙私塾の束脩は形式的なものであり，他方，学金は礼物ではなく金銭として贈るという性格のものであり，今日の学費のようなものであったことが明らかになる。またその金額は地方間の格差が大きく，教員の学位によっても異なっていた。また，学金は，舒新城と胡適のなどの例にみられたように，金額が統一されておらず，「児童の家庭がそれぞれの経済状況を応じて」分担するというものであった。

3．啓蒙私塾の学習内容と指導法

前述の60名の年譜や伝記をもとに啓蒙私塾における学習内容を分析し，その中でも記載が比較的明確な15人の学習内容を年の順にまとめたものが表5である。

(1) 啓蒙私塾の学習内容と学習の順序

15名の児童の7年間の学習内容を分析すると，識字・読書・作文（科挙受験科目を含め）の3科目に分類することができる。そのうち，識字と読書という2科目について勉学した児童は5名であり，識字・読書・作文など3科目について勉学した児童は6名，そして読書と作文など2科目について勉学した児童は4名である。さらに，読書から学んだ4人の中に，舒新城を除いてほかの3人（顧炎武・黎培敬・王壬甫）は入学以前に，父母あるいは祖父母から漢字を教わっていた。このことから，啓蒙私塾の学習が識字・読書・作文を中心に行われていたことが明らかになる。

また，表4掲げた15人の年譜や伝記をもとに，啓蒙私塾の教材（教本）を分析すると，識字は，主に「三字経」・「百家姓」・「千字文」を用いて行われていた。この3冊の教本は何れも長い歴史をもっている。「三字経」は，「人之初，性本善，性相近，習相遠」ではじまる。内容は一般的事物より始まり，簡単な中国歴史に及んでいる。「百家姓」は，「趙銭孫李，周呉鄭王」で始まり，中国の姓氏を4文字句に組み，1句ずつを隔てて押韻するものである。「千字文」は，「天地玄黄，宇宙洪荒」で始まり，毎句4文字で，内容は宇宙より微物に至る事象を包含し，しかも全書において1文字も重複していない[17]。

読書については，上述の「三字経」・「百家姓」・「千字文」も初級教本として使っている。が，もっと程度高い教本としては，詩歌の類では「千家詩」と「唐詩三百首」がよく使われ，経書の類では，まず「大学」「中庸」「論語」「孟子」の四書や「孝経」などが用いられ，さらに進んでは「詩経」「書経」「易経」「礼記」の五経と「左傳」などに至る。

作文は，まず対句から始まる。対句は，作詩や作文の基礎であると見られ，啓蒙私塾においてはかなり重んじられていたようである。対句の練習を重ねてから，科挙試験の定型作文や詩歌を作り始め，科挙の予備試験に関連する主要な科目の勉学に進む。

(2) 啓蒙私塾の学習指導法

前述したように，啓蒙私塾における最初の学習内容は漢字を覚えさせることである。清代の蒙学教育家王筠がその方法について次のように説明している。すなわち，「啓蒙の時は，最初読書せずに，識字する。まず象形文字を取り，実際のものを指して教えること。日と月の文字を教える際に，空にある太陽と月を連想させ，また上と下の文字を教える時に，上にあるまたは下にある実物を連想させること」と記している[19]。

さて，実際に教員は識字をどのように指導していたのであろうか。これについて，陳鶴琴の回顧に

表 4　啓蒙私塾の学習内容と学習の順序

姓名	生年月	出身地	入学年齢	学習内容・教材と学習の順序						
				第 1 年	第 2 年	第 3 年	第 4 年	第 5 年	第 6 年	第 7 年
顧炎武	万暦 41（1613）年	江蘇昆山県	7 歳	四書五経	四書五経	周易	孫子兵書・左傳	資治通鑑	科挙の科目	科挙文章
黄叔琳	康熙 11（1672）年	河北大興	5 歳	識字・四子書	不詳	易経・詩経	尚書	左傳	科挙の科目	礼記
洪亮吉	乾隆 11（1746）年	江蘇陽湖県	5 歳	識字（800 字程度）	礼記・大学・中庸	論語	論語	不詳	孟子・毛詩	毛詩
銭宝琛	乾隆 50（1785）年	江蘇太倉県	6 歳	識字	四子書	四子書	経書	不詳	不詳	不詳
殷兆鏞	嘉慶 11（1806）年	江蘇呉江県	6 歳	千字文・孝経・四子書・礼記・周礼・儀礼・左傳・唐詩三百首						科挙の科目
左宗棠	嘉慶 17（1812）年	湖南湘陰	5 歳	不詳	論語・孟子	不詳	不詳	科挙の科目	不詳	不詳
黎培敬	道光 6（1826）年	湖南湘潭県	6 歳	論語・唐詩	孟子	毛詩	尚書・周易	礼記	春秋・左傳	左傳・作詩
王壬甫	道光 12（1832）年	湖南湘潭県	7 歳	論語・孟子	論語・孟子	五経	作文	自学	自学	自学
繆荃敏	道光 24（1844）年	山東福山県	6 歳	識字・唐詩	不詳	四書	四書・詩経	詩を作る	五経	五経・周礼儀礼
唐文治	同治 4（1865）年	江蘇太倉県	6 歳	識字・孝経	論語の素読	孟子の素読	詩経	尚書	周易	礼記・科挙定型作文
包天笑	光緒 2（1876）年	江蘇蘇州	5 歳	識字・三字経・詩品・孝経・論語		孝悌図説・児童故事	論語・大学・中庸・孟子		礼記・唐詩三百首・作文	
李根源	光緒 5（1879）年	雲南沖騰県	8 歳	三字経・百家姓・千字文	孝経・出師表など	四子書	四子書（終り）	不詳	不詳	四書五経
李宋黄	光緒 13（1887）年	雲南鶴慶州	7 歳	三字経・千字文・千家詩・孝経・幼学瓊林・論語・孟子・大学・中庸・古文観止・唐詩合解・科挙の科目（作文）						
胡適	光緒 17（1891）年	安徽績溪県	4 歳	父が編んだ四文字詩など・小学・論語・大学・中庸・詩経・書経・易経・礼記						
舒新城	光緒 19（1893）年	湖南溆浦県	6 歳	論語・孟子・大学・中庸		四書の講釈をうけながら詩経の素読		書経	作文・科挙の科目	

出所：〔清〕張穆「顧亭林先生年譜四巻附校補」巻一などより作成[18]

よれば，まず「描紅格」と呼ばれ，赤い木版刷りの手本を黒筆でなぞる。通常「千字文」または「上大人，孔乙己」で始まる数語が刷られている。当初は教員が手を執って書かせ，同時に，如何に書けば力が入るかを口述してくれるという[20]。

また，前述の包天笑の回顧録によると，入塾後まず集中的に漢字を覚え込むことを強制された。毎日漢字を20個位学び，2か月間にならないうちに，1,000文字を覚え込んだ。識字の指導法は，漢字のかたちと発音だけを覚えさせ，すなわち最初は文字をどう書くか，またどう読むかを指導してくれたが，字の意味を解釈してくれなかったという[21]。

上述した蒙学教育家王筠は，「児童が2千文字を覚えてから，はじめて読書し得る。その内容について教員が講釈しなければならない」と説明している[22]。一方，同じく清代の教育家陳芳生は，「毎日，新しい文章を百回読む。百回まで朗読したら，その意味がさらに理解できる」[23]と述べた。しかし，啓蒙私塾教育を受けた人々の回顧録をみると，ほとんどすべての人が実際に「読死書」（講釈を伴わぬ読書）を経験した。

例えば，舒新城の回顧録『我和教育』によると，彼が数え年5歳になると，啓蒙私塾に入り，突然に論語の勉学が始まった。その教育方法については，「私塾の唯一の課業は読書であり，読書の唯一の目的は暗誦できることである。先生が単語のつづりをしないだけでなく，文章の意味を講釈してくれなかった」という。前述したように，舒新城は，8，9か月間のうちに「論語」第1冊を丸暗唱することができたが，その意味については殆んど理解できなかった[24]。

また，李季は6歳から12歳まで，啓蒙私塾に通っていたが，私塾の教育について，「塾の先生の最大の責任は，生徒にむだ読み，むだ憶えのみさせて，講義はあまりしようとしなかった。私は『詩経』『四書』全部を暗誦し得たけれど，オウムが話す如く，全然書中の意味は分からなかった」と回顧している。授業の様子については，児童は1人ずつ教本を携えて教員の前に出て，その机上に置く。教員が1句を読み上げると，児童はそれについてその句を読み上げる。かくて1節読み上げると，教員はその節の最後の字のそばに朱丸を施し，目印とする。児童はそこで初めて許され席に返るのであるという[25]。

このような「読死書」によって，胡適が回顧録で述べたように，数年間私塾に通って，「四書」など儒学の教典まで学んだ生徒が，手紙の書き出しさえわからない場合すらあった。その原因は，毎日素読と暗誦を強要するだけで，生徒たちは本に書いてある内容がまったく理解できておらず，文章を読んで講釈がないのは，「空念仏」と同じことで，何の役にも立たないからである[26]。また，陳鶴琴は，「私が読んだ書物を，先生は何れも講義してくれず，ほとんどむだ読みに等しかった。6年間の最も貴重な歳月は，3，4千字を覚えた以外，ほとんどそっくり水に流したといえるぐらいだ」[27]と回顧した。

以上のような児童の個性を無視した機械的暗誦という啓蒙私塾の教育方法は，児童に大きな精神的苦痛を与えた。その結果，児童たちは課業をサボる，いわゆる「逃学」の道を選んだのである。郭沫若は近くの私塾から聞こえた歌のような朗読に心を引かれて，4歳のうちに自分の意思で入学したが，

入塾後日ならずして嫌気がさし，登塾を拒否するようになり，結局父の強制手段をもって私塾に担ぎ込まれたのである[28]。また，沈従文は「逃学」の常習者で，かつ課業をサボる口実に腐心して嘘つきの常習者となったという[29]。胡適の同級生は，「逃学」を繰り返し，稲田に隠れて飢えを耐え忍んでも，教員から厳しい体罰を受けても，私塾の授業を拒否し続けたという[30]。

終わりに

以上，清代中国における啓蒙私塾の普及状況や経営形態，教育活動等について諸資料に基づいて考察し，その特徴を明らかにした。その主な結果を要約すると，次のような点を指摘できる。①啓蒙私塾の普及状況は私塾1校当たりの人口は730人前後であり，児童の啓蒙私塾への入学率が10％未満である。②啓蒙私塾は，教員が個人経営したものであり，また「学金」（学費）は私塾運営の主要な財源である。③私塾教員の多くは科挙予備試験に合格していないいわゆる「小読書人」であり，私塾を専業として経営していた者は多くみられる。④啓蒙私塾への入学年齢は5歳～8歳に集中しており，初等教育内容を修了するには，4年～7年間位かかるようである。⑤学習が科挙の予備試験に関連する主要な科目を中心に行われていた。その教授方法は主に個別指導をしていたが，暗記中心となっていたのであることがわかる。

注(1)　学部『改良私塾章程』陳学恂主編『中国近代教育史教学参考資料』（上冊）所収，人民教育出版社，1988年，pp. 756-758。

(2)　この表は以下の資料よりまとめられたものである。

(1)『永嘉県志』方志出版社，2003年。(2)『諸暨県志』浙江人民出版社，1993年。(3)『岱山県志』浙江人民出版社，1994年。(4)『奉化市志』中華書局出版，1994年。(5)『普陀県志』浙江人民出版社，1991年。(6)『邳県志』中華書局出版，1995年。(7)『溧陽県志』江蘇人民出版社，1992。(8)『桐城県志』黄山書社，1995年。(9)『霊璧県志』浙江人民出版社，1991年。(10)『寿寧県志』鷺江出版社，1992年。(11)『建陽県志』群衆出版社，1994年。(12)『修水県志』海天出版社，1991年。(13)『確山県志』生活・読書・新知三聯書店，1993年。(14)『登封県志』河南人民出版社，1990年。(15)『新安県志』河南人民出版社，1989年。(16)『即墨県志』新華出版社，1991年。(17)『平邑県志』斉魯書社出版，1997年。(18)『河北省志』第76巻『教育志』，中華書局出版，1985年。

(3)　7～15歳の児童数の百分比を求める方法は，拙稿「中国民衆の初等教育普及状況に関する史的考察」，日中教育研究交流会議編『研究年報』第14号（2004年7月）に参考。

(4)　舒新城『我和教育：三十五年教育生活史（1893-1928）』中華書局出版，民国34（1945）年，p. 10。

(5)　『河南通志』同治8（1869）年刊行。

(6)　『奉化県志』巻九学校，光緒34（1908）年刊行。

(7)　以下の文献を用いて分析した。

(1)〔清〕方苞等撰『孫夏峰先生年譜』巻上。(2)〔清〕倪会鼎『倪文正公譜』巻之一。(3)〔清〕呉騫『陳乾初先生年譜』上巻。(4)〔清〕金鏡『金忠潔年譜』。(5)〔清〕蘇元『張楊園先生年譜』。(6)〔清〕張穆『顧亭林先生年譜四巻附校補』巻一。(7)〔清〕魏荔彤『魏貞菴先生年譜』巻上。(8)〔清〕魏学謐『魏敏果公（自述）年譜』。(9)〔清〕申涵煜『申鳧盟先生年譜』。(10)〔清〕趙之謙『張忠烈先生年譜』。(11)〔清〕程光垣『李文襄公年譜』康熙32（1693）年刊行。(12)〔清〕翁叔元『翁鉄庵年譜』康熙年間刊行。(13)〔清〕張穆『閻潜邱先生年譜四巻』巻一，道光26（1846）年刊行。(14)〔清〕李清植『文貞公年譜二巻』巻上。(15)〔清〕

馮辰『李恕谷年譜五巻』巻一，康熙51（1712）年。(16)〔清〕顧鎮『黄崑圃先生年譜』巻上。(17)〔清〕張廷玉『澄懐主人自訂年譜七巻』巻一。(18)〔清〕羅継祖『朱笥河先生年譜』乾隆14（1749）年。(19)〔清〕汪輝祖『病榻夢痕録二巻』巻上，嘉慶1（1796）年。(20)〔清〕呂培など編『洪北江先生年譜』。(21)〔清〕蔣攸銛『蔣礪堂自訂年譜二巻』巻上。(22)〔清〕楊芳撰『宮傅楊果勇侯自編年譜』巻之一。(23)〔清〕梁章鉅『退庵自訂年譜。(24)〔清〕銭宝琛『頤寿老人年譜』巻上。(25)〔清〕駱秉章『駱公年譜』。(26)〔清〕程庭鷺『夢盦居氏自編年譜』。(27)〔清〕趙光『(28) 王家口撰『王文勤公年譜』。(29)〔清〕殷兆鏞『殷譜経侍郎自訂年譜二巻』。(30)〔清〕郭松濤『羅忠節公』上巻。(31)〔清〕董恂『還読我書室老人手訂年譜』巻一，光緒18（1892）年。(32) 簡朝亮『朱九江先生年譜』。(33) 滕国『蔣剣人先生年譜』『図書館学季刊』巻九第二期。(34) 厳樹生『胡文忠公年譜』。(35) 羅正鈞『左文襄公年譜』巻一。(36) 馬新祐『馬瑞敏公年譜』。(37) 羅正鈞『王壮武公年譜二巻』巻上。(38) 黎培敬『竹間道士自述年譜』。(39) 王代功『湘綺府君年譜六巻』巻一。(40) 周盛傳『磨盾記実』。(41) 胡鈞『張文襄公年譜六巻』。(42) 労乃宣『劬叟自訂年譜』民国10（1921）年。(43) 繆荃孫『芸風老人年譜』。(44) 金兆豊『晏海澄先生年譜』巻一。(45) 韓国鈞『止叟年譜』。(46) 沈成式『沈敬裕公年譜』。(47) 梁煥鼐『桂林梁公先生年譜』。(48) 汪康年『汪穰卿先生傳記』巻一。(49) 張澍棠撰『張提法公年譜』。(50) 愼初堂『瀏陽譚先生年譜』。(51) 唐文治撰『茹経年譜』。(52)〔清〕張星ā『泗陽張沌谷居士年譜』。(53) 章炳麟『太炎先生自訂年譜』。(54) 包天笑『釧影楼回憶録』香港大華出版社，1971年。(55) 趙万里撰『王静安先生年譜』。(56) 李根源『雪生年録』巻一。(57) 李宗黄『李宗黄回憶録』（上）（台湾）中国地方自治学会出版，民国61（1972）年。(58) 胡適『四十自述』亜東図書館出版，民国22（1933）年。(59) 郭沫若『我的幼年』民国18（1929）年。(60) 舒新城『我和教育：三十五年教育生活史（1893-1928)』中華書局出版，民国34（1945）年。

(8) 李根源『雪生年録』巻一。

(9) 胡鈞『張文襄公年譜六巻』巻上。

(10) 『同前書』，pp. 15-16。

(11) 田中謙二「旧支那における児童の学塾生活」『田中謙二著作集』第二巻所収，2000年，p. 88。

(12) 包天笑『前掲書』，pp. 32-33。

(13) 『辞海』縮印本，上海辞書出版社，1980年，p. 1955。

(14) 包天笑『釧影楼回憶録』香港大華出版社，1971年，p. 73。

(15) 舒新城『前掲書』，p. 17-18。

(16) 胡適『四十自述』亜東図書館出版，民国22（1933）年，pp. 43-44。

(17) 田中謙二「前掲書」，pp. 92-93。

(18) この表は，次の文献により作成した。

(1)〔清〕張穆『顧亭林先生年譜四巻附校補』巻一。(2)〔清〕顧鎮『黄崑圃先生年譜』巻上。(3)〔清〕呂培など編『洪北江先生年譜』。(4)〔清〕銭宝琛『頤寿老人年譜』巻上。(5)〔清〕殷兆鏞『殷譜経侍郎自訂年譜二巻』。(6) 羅正鈞『左文襄公年譜』巻一。(7) 黎培敬『竹間道士自述年譜』。(8) 王代功『湘綺府君年譜六巻』巻一。(9) 繆荃孫『芸風老人年譜』。(10) 唐文治撰『茹経年譜』。(11) 包天笑『釧影楼回憶録』香港大華出版社，1971年。(12) 李根源『雪生年録』巻一。(13) 李宗黄『李宗黄回憶録』（上）（台湾）中国地方自治学会出版，民国61（1972）年。(14) 胡適『四十自述』亜東図書館出版，民国22（1933）年。(15) 舒新城『我和教育：三十五年教育生活史（1893-1928)』中華書局出版，民国34（1945）年。(清) 王筠「教童子法」『霊鶼閣叢書』第一集，光緒21（1895）年刊行。

(19) (清) 王筠「教童子法」『霊鶼閣叢書』第一集，光緒21（1895）年刊行。

(20) 陳鶴琴「我的半生」『田中謙二著作集』第二巻所収，2000年，p. 100。

(21) 包天笑「前掲書」，p. 7。

(22) 陳鶴琴「前掲書」。

(23) (清) 陳芳生「訓蒙条例」『檀几叢書』巻十三。

(24) 舒新城『前掲書』，p. 18。

(25) 陳鶴琴「前掲書」，pp. 94-95。
(26) 胡適『前掲書』，pp. 45-46。
(27) 陳鶴琴「前掲書」，p. 64。
(28) 郭沫若『我的幼年』民国 18（1929）年，p. 38。
(29) 沈従文『沈従文全集』第 13 巻・伝記，北岳文芸出版社，2002 年，p. 252。
(30) 胡適『前掲書』，pp. 42-43。